

## 「第14回都道府県勢の展望」の見方……………

### 《はじめに》

過日、「第14回都道府県勢の展望(統計からみた茨城の地位)」を各行政機関等の協力を得て刊行した。

基礎データ編及び個別指標値編に区分し724のデータを基本としている。今回は、第13回(昭和55年版)において統計データの実質比較の容易な指標値を一部採用し好評を得たことから、さらに拡大し、又、基礎データと指標値との相互利用の利便を考え、項目別の分類体系を同じように編集している。

以下、本書を活用する際の留意点なり見方について簡単に説明してみたい。

### 《一般的事項》

1. 基礎データの下欄に、出典資料機関、年度及び資料名称を明記している。調査機関は、調査目的に応じた調査方式(調査対象を含め)、調査内容等を企画・設計(主に、各属性間の比較及び地域間の比較等、集団の特性の把握)することから、調査機関が異なる場合、類似調査であっても数値が一致しない。数値の性質が理解されていないと、加工、分析の結果が誤った方向で結論づけられてしまう危険性があるため、本書に限らず二次資料(一次資料は原報告書)では出典資料名等を明記することになっている。

したがって、項目ごとの具体的調査内容を把握したい場合は、出典資料機関(末端調査機関を知りたい場合は、統計課に連絡されたい)あて照会されたい。

2. 基礎データの数値を先入観にもち本県の情勢を判断することは危険であり、各項目間の相対的比較が必要である。(イギリスにおける、僧侶と運転労働者の死亡数と死亡率のたとえ＝僧侶の死亡率が高い＝(答)僧侶は高齢者が多い)〔例〕死亡率、道路舗装率etc。

3. 基礎データの数値から各項目ごとの全国で占める割合がどの程度になっているか、全国ランクづけと併せて調べておくことも意義がある。

ちなみに、全国シェアの平均が2.1パーセントであり、総面積と可住地面積の関連性をみると、総面積は0.5パーセント低くなっているが可住地面積では0.9パーセント上回っている。これは全国的にみて、本県は総面積に占める可住地面積が高く、条件整備を図ることにより

飛躍的に発展できる可能性を有していることがうかがえる。

4. 計画策定段階における基礎資料として、自然的条件及び社会的条件と併せて一番重要な人口がある。将来予測の決め手となる人口推計は、時系列変化と付加価値人口(経済的、社会的要因に基づく人口推計)をベースに試算されるが、今回刊行の本書からは人口推計を出すことは不可能である。本書は、初刊から数えて第14回を迎えており、二次資料としての性格をもって基礎的部分の収集に努めている。したがって、推計人口に限らず時系列変化等を行うのであれば、前回までの本書をひもといいただきたい。

### 《基礎データと指標値の相互利用》

基礎データと指標値の相互利用を図るため、項目の分類体系を同じようにまとめている。(前述2の関連)

以下、別表により若干の解説を試みているが、社会性、地域性により専門的角度でみる必要の部分が少なからず認められ、一概に結論づけることは危険であるが、一般的な統計データの見方で判断することを断っておきたい。又、紙面の関係もあり一部のみの解説で御了承願いたい。

1. 総面積当たりの人口密度は $\left(\frac{\text{県}}{\text{全国}} = 1\right)$ とした場合1.34と0.34ポイント上回っているが、可住地面積が全国シェアを0.1パーセント上回っていることもあり、可住地面積当たりの人口密度は0.72と0.28ポイント下回っている。前述2の関連性がうかがえる。

2. 都市公園面積は全国ランクが24位であり、全国シェアが1.6パーセント(全国でならずと2.1パーセントが平均となる)と全国を0.5パーセント下回り、1人当たり都市公園面積においても0.74と0.26ポイント下回っている。本県の都市公園は、首都圏に位置していながらやや整備の遅れがうかがえる。

3. 労働力人口(15歳以上)は全国シェアを0.1パーセント上回っているが、失業率では0.71と0.29ポイント下回っている。また、事業所総数では全国シェアを0.2パーセント下回っているが、事業所増加率(昭和53年と昭和56年の対比)は1.55で0.55ポイント上回る結果となっている。首都圏に位置した有利さと、高度経済成長以降の余波が続き開発指向によるもので、一応の就労場の確保が図られているといえよう。(失業率の定義に留意する必

統計からみた茨城の地位

要があるが)

以上、3項目について述べてみたが、以後基礎データと指標値との相互関連をみて行き、そこに何が起因して差異が生じているのかみて頂ければ、統計データの利用に興味をもたれるのではないかと思われる。

《今後の課題》

最近の内外諸情勢の変化は地方自治体の行財政運営にも厳しい選択が余儀なくされ、種々の多面的な利活用が不可欠の状況にある。本書においては、利活用者の意向を十分に踏まえた総合的な統計書(二次資料)を目指しているが満足に至っていない面がある。(利活用者からの要望)

1つには、基礎データの収集である。

現在、二次資料としての各種統計データを総合的に収集した統計書は、市町村の統計データを基本とした統計年鑑と同課が最近刊行した社会生活統計指標がある。本書は、

総合的な統計書の性格を目指し、各種データを網羅的に捕え利活用者の利便に供することを第一義と考えているが、業務統計の収集に限界があり、統計法(指定統計等)の範囲で公表される全国ベースのデータ確保が精一杯の現状である。

2つには、各項目の時系列変化の分析である。

過去からの変化を変化数、変化率で捕え、高度化、多様化の著しい経済社会の将来の目標、予測を高率的、効果的に捕える必要がある。本来、加工、分析は、利用する者がその利用目的に基づく方向で専門的手法をとり入れ行うものであるが、全体的な傾向をつかみ業務上参考にしよと者にとっては得難いものとなろう。時間的な制約等もあり具体化されない現状である。

今後、これらの課題を踏まえて改善可能の方策を検討してゆく必要がある。

別表【例】

《基礎データ》

《指標値》

分類・項目	調査時期	単位	データ		本県順位	全国シェア(%)	分類・項目	調査時期	単位	データ		本県順位	県全国=1
			全国	茨城						全国	茨城		
(土地)													
総面積	55.10.1	km <sup>2</sup>	377,708.09	6,091.92	24	1.6	(土地) 可住地面積割合	55年	%	32.7	61.7	5	1.89
可住地面積	55.8.1	km <sup>2</sup>	123,390.0	3,761.0	4	3.0	都市公園面積(1人当たり)	55年3月末	m <sup>2</sup>	3.44	2.53	37	0.74
都市公園面積	55.3.31	ha	40,260.0	646.4	24	1.6	(人口)						
(人口)													
総人口	55.10.1	(千人)	117,057.5	2,557.9	12	2.2	人口密度(総面積当たり)	55.10.1	人/km <sup>2</sup>	314.1	419.9	13	1.34
世帯数	55.10.1	(千世帯)	35,814.8	690.2	13	1.9	人口密度(可住地面積1km <sup>2</sup> 当たり)	55.10.1	人/km <sup>2</sup>	948.7	680.1	35	0.72
人口増減数	55年	(千人)	854.1	43.6	6	5.1	世帯人員	55.10.1	人	3.22	3.67	5	1.14
(労働)							老年人口割合	55.10.1	%	9.0	9.3	33	1.03
労働力人口(15歳以上)	55.10.1	(千人)	57,076.1	1,265.4	13	2.2	(労働)						
(事業所)													
総事業所数	56.7.1	(千事業所)	6,488.3	125.4	14	1.9	失業率	55年	%	2.47	1.75	37	0.71
(農業)							(事業所)						
農家数	55.2.1	(千戸)	4,661.4	172.9	3	3.7	事業所増加率(総数53年~56年)	56.7.1	%	7.1	11.0	3	1.55
農業粗生産額	54年	(億円)	104,774.9	4,905.4	2	4.7	(農業)						
農家所得	54年	千円	4,417.7	4,129.5	30	—	農業粗生産額(就業者当たり)	54年	万円	150.2	177.5	7	1.18
(電気・ガス・水道)							生産農業所得(農家当たり)	54年	(万円)	112.0	140.1	10	1.25
電力総使用量	55年	(億Wh)	4,364.0	99.0	12	2.3	(電気・ガス・水道)						
下水道処理区域人口	54年度末	(千人)	29,033.8	206.1	22	0.7	水道普及率	54年	%	91.0	69.2	47	0.76
(衛生)							下水道普及率	55年	%	30.0	11.0	33	0.37
病院・診療所施設数	55年末	所	86,665	1,365	21	1.6	(衛生)						
医師数	55年末	人	156,235	2,356	20	1.5	病院・診療所施設数(10万人当たり)	55年末	所	74.1	53.4	45	0.72
成人病死亡者数	55年度	(千人)	472.0	11.1	13	2.4	救急医療施設数(10万人当たり)	56.4.1	所	4.39	4.77	20	1.10
(教育・文化)							成人病死亡者数(10万人当たり)	55年末	人	406.2	434.6	30	1.07
図書館数	56.5.1	所	1,436	15	34	1.0	(教育・文化)						
スポーツ施設数	55.1.1	所	213,686	5,333	15	2.5	教員当たり児童・生徒数(小学校)	56.5.1	人	25.2	25.1	15	1.00
海外渡航者数	55年	(千人)	3,909.3	56.9	13	1.5	教員当たり児童・生徒数(中学校)	56.5.1	人	20.5	21.6	8	1.05
(犯罪・事故・災害)							大学等進学率	56.5.1	%	31.4	22.3	40	0.71
刑法犯検挙人員(交通業過を除く)	55年	人	392,113	6,845	16	1.7	スポーツ施設数(千人当たり)	55年	所	182.5	208.6	26	1.14
交通事故件数	55年	件	476,677	10,263	13	2.2	(犯罪・事故・災害)						
出火件数	55年	件	59,885	1,514	12	2.5	刑法犯総数に占める少年犯罪の割合	55年	%	42.4	44.7	31	1.05
救急出場件数	55年	(千件)	2,007.7	37.4	13	1.9	交通事故死傷者数(10万人当たり)	55年	人	519.0	536.4	22	1.03
							道交法違反検挙件数(免許所持者千人当たり)	55年末	件	270.7	233.9	33	0.86
							消防吏員・団員数(10万人当たり)	55年	人	1,014.1	1,312.6	20	1.29
							消防ポンプ自動車数(千世帯当たり)	55年	台	0.50	1.13	4	2.26

注意) 単位の( )は、刊行物の単位と異なり、本表のために使用している。

## 新人のプロフィール

6月の定期異動で新たに統計課勤務となった8名を紹介します。



### 転勤雑感

企画分析  
田村 哲也

今回の定期異動で統計課に配属された。昭和49年4月、国体局に初めて勤めて以来8年2ヵ月で、5課目である。平均約2年の異動で、どの課所も部が異なる。国体局、商工労働部、総務部、衛生部、企画部であるが、県の仕事という意味では同じだがその内容は大きく異なる。

さて、今までの勤務は竜ヶ崎保健所で、通勤は片道約2時間かかった。今度は片道約30分、しかも、乗換えなしである。今までは乗換えも2回あり雲泥の差といえる。ただ残念なことに今までもっぱら本を読むことに使っていた時間がなくなった。しかし、肉体的疲労が少なくなったうえ例えば、酒を飲む際、乗りすごしを心配せずに飲める、といった精神的な面でずいぶん楽になった。もともとその分は、新しい職場、新しい仕事という点で相殺されるような気がする。

今後、不慣れのため、あるいは能力不足のため失敗することがあると思うが、一生懸命やっていきたいと思う。



### 日曜日の午後

人口労働統計  
木村 喜美子

日曜日の3時頃ともなれば家事や雑事から解放されて、散歩用の靴をはいて近所や少し遠くまで1時間程度のコースを歩きます。

2年ほど前4ヵ月程の入院生活があり、その後健康維持のために続けているもので、少し疲れている時でも、小雨でも、時々自転車でやってくる友達もその時間帯に入れば一緒に歩いてくれるのです。20～30分も歩くと肌もうっすら汗ばんで、いつの間にか頭は日常の時間感覚から離れ、自分の日常生活が小さく見えて時間からまったく自由になり、自然の中にとけこんでいくのです。そうして歩き続けていると記憶力の鈍った頭にも不思議なほど若い頃覚えた詩や歌の一節がうかんできます。

「記憶は力なり」と言われるように言葉や数字を正確に暗記し、必要に応じて、それを引用出来れば日常生活も、会話も、一段と楽しくなるのではないのでしょうか。もしこの散歩が落ちた知力と体力に少しでも活力を与えてくれたら幸いです。



### 歌の心

商工統計課長補佐  
竹江 武夫

別れの一本杉の作詩家高野公男は、幼少の頃から私と仲よく遊んだ友達で、戦後まだ食糧事情も悪く物も不足している時代に音楽で身を立てようと突然東京へ出た。私は県に勤めるようになり自然に音信もと絶えるようになったが、ある日友人から電話で「吉郎(公男)が国立水戸病院に入院している」という連絡を受けた。驚いてすぐ病床を訪ねたがだいたい病状は悪化しているらしかった。安静時間だったので長居もできず励まして帰ったが、それから何日も経たないで訃を知った。高野公男は同じ志を立てて栃木県から上京した船村徹と出遭ってから意気投合し、寝食を共にして歌の勉強に励んだ。苦しい毎日の連続で遂には自分の血を売りにながら演歌の心をつかむことに情熱を打ち込んだようである。このような苦しみの中から次々と歌は生まれた。「あの娘が泣いてる波止場」「早く帰ってこ」、続いて「黒いコートあの女」そして「別れの一本杉」……と。

ひとつの歌が生まれるまでには、その裏には、はかり知れないものが素地となっていることを知って、あらためて歌の心に魅せられるのである。

かけがえのない友を亡くした船村徹は、高野公男の郷里に墓誌を建て、優しく呼びかけるように「友よ土の中は寒くはないか、暗くはないかい……」と刻んでいる。



### 再び統計課に来て

商工統計係長  
小野崎 康雄

今回の異動ではからず二度目の奉公となった。7年前に比べ、課員、市町村担当職員の大多数が替わられた。私自身も商工統計の担当は初めてであるので不安と焦りが感じられる。幸い、良き先輩、同僚に恵まれ、なんとか一日、一日を過ごしている今日この頃である。

統計課を離れて外からみると、例えば県職員や一般の方々によっても統計に対する認識度(ここでは、如何なる業務か、又はどの様に統計を作成しているか等の一般的知識をいう)がやや低いように思えてならない。勿論、良き理解者も大勢いる。ある一つのデータを出すにしても、ばく大な労力やお金が費やされているのである。統計を利用する方は、この点を理解され、利用にあたっていただきたい。これは統計に従事する人達の卒直な声である。統計利用度も高くなれば統計マンにとってうれしいし励みにもなる。反面、さらに良き統計を作ることを心がけ、利用

する方に応える必要がある。そうすれば、統計に対する認識度もおのずと高まってくるとは思わないか、と私は思う。



## 統計課に赴任して

商工統計  
勝村 照雄

6月1日付で統計課にまいりました。まだ赴任して20日たらず、やっとグループ内の人の顔と名前が一致する程度です。課内の人数としては前課所(水戸県税)と同程度ですが、部屋が別れているので顔を合わせる機会も少なく街で会っても失礼することがあるかもしれません。

統計というと、まず頭に浮かぶのは国勢調査ですが、実際に統計事務を担当することになり、これほど多くの統計があるとは知りませんでした。またこれだけの統計調査により、その結果を全部、十分活用出来るのかと思うと多少疑問もあります。これから?年間統計課で皆様と一緒に仕事をする訳ですが、この道に入った以上一日も早く職場になれ、一人前の統計マンになりたいと思っていますので、良き先輩方よろしくご指導の程お願いいたします。



## 一 思考

商工統計  
小松崎 祝雄

県の行政全般を、“統計”という“数の表現”で大局的に見とおす事のできる統計課に勤務を命ぜられ、はや1カ月を過ぎ、業務も概念的ではありますが、判ってきた現在、改めて“統計”という“数の表現”の重みと、奥の深さを再認識している昨今です。……わずか“0”から“9”までしかない数で表現される無限無数の“数の表現”に潜む、県民の多種多様な実体模様……。

こういった観点から“統計”という業務を捕え、その業務の一過程に携わり、それを外的資料で提供する立場として思う事は、この様に重要で、かつ波及効果の大きいものであるからして、より現実性に富み、より信ぴょう性の高い“統計”資料を提供する事が責務であり、その為には、情報提供者—情報収集者—情報審査・集計・公表義務者(個人的図式)といった統計事務経路なるものを、十分認識した上で“数の表現”統計資料の作成に徹力ながら尽力したいと思うと同時に、こういった統計事務過程を経、公表された“数の羅列的”資料の中からも、県の行政の動向といったものを絶えず読み取る様な姿勢を保ちたい、と思っております。



## 小さな楽しみ

商工統計  
黒沢 文男

一日の仕事が終え、室内の人々が帰りはじめるところ、机

の中から日誌を取り出し、その日の事を簡単に書きとめておく。平凡な日々の中から、何かを見つけなければと思いい数年前からはじめた。一日の中の小さなでき事、印象に残る言葉、何もないと天気のこと、窓外の風景の事などを書く。ところが、特別意識している訳ではないが、仕事に関することはほとんど書かない。文章をつづるということは、時として、今まで自分が考えもしなかった事や思いもしなかった世界にめぐりあうことがあり、その中で、自由に遊ぶことができる。その日誌をパラパラとめくってみると、忘れかけた人を思いおこすこともあり大変なつかしい。

統計課に移っての最初の記述は、二日酔いに悩まされていることであった。そういえば、最も多い記事は、酒を飲んだことであり、二日酔いのことである。そして、長文になることは、女性に関する記事である。実は、こういう自分に非常に失望しているのである。



## 職場と健康

農林経済  
田谷 芳明

統計という言葉は、日常生活の中でも割と聞き慣れているのではないだろうか。しかし、この仕事の重要性、必要性となってくると、なかなか深いものがあるらしい。自分も正直のところ、統計課という職場については、机の上が資料等で山積されているとしか思っていなかったのである。こうして新しい職場に入ってみると、その苦勞を感じさせられるようである。このような重要な仕事をするのには、何んといっても健康な体力である。前職場では医療機関等へ出かける機会がよくあった。そこでは、よく「病院等の待合室はサロン化している」ということを話しには聞いてきたが、こうしてこの目でみてみると、なるほどという感じもしないでもない。しかし、必ずしもこうした人達の時間の過し方などに、無駄が多いとは言いきれないものがあるのではないかという感じがする。健康を維持するためには精神面、機能面等でも日常生活の中でのバランスに気をつけなければならないことは誰もが知ってはいるが、なかなか容易な事ではない。その点このような待合室などでは遠慮なくでき、自然に機能訓練等が養っていける格好の場所となっている。もちろん、これには医療費という高額な出費がつきまとい、これがあまりにも目立っているため、この訓練の効果が薄れてしまっているような気がしてならない。

自分の体力に応じて適度な精神面、体力等の訓練が日常生活の中で、是非必要であるのではないか。情報時代などと騒がれている今日では、神経を使う仕事が増え多くなりつつあるのだから。